

県選手権で離島勢初Vの奈良尾クラブ

県選手権大会が軟式球の使用に復活して13回目となる昭和53年の第28回大会決勝戦に進出したのは、上五島の奈良尾クラブと松浦の中興化成工業。過去27回の歴史の中で長崎、佐世保のチームが決勝戦に絡まなかったのは第1回大会(日鉄御橋炭鉱=北松VS長崎刑務所=諫早)以来のことであった。

その年の参加数は14。推薦出場は軟式復活して12回のうち6連覇を含む8度優勝の三菱重工長崎。県北の雄・親和銀行は8月の天皇賜杯ベスト4に続き、長野国体も出場したが県選手権大会と日程が重なり不参加となった。

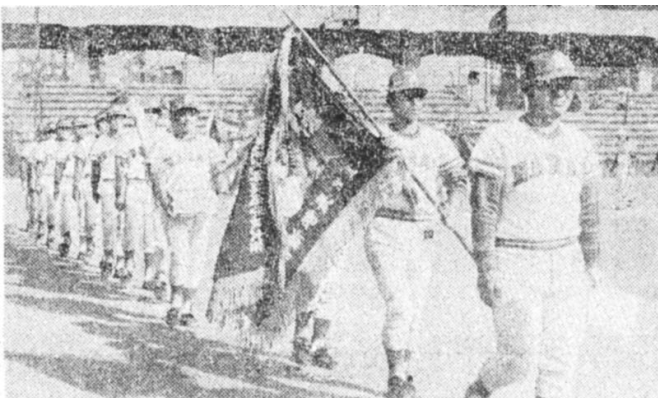
三菱重工長崎を倒したのは二回戦で対した中興化成工業。左腕・岩本が散発3安打1失点に抑え2-1で逃げ切り、準決勝も電々大瀬戸を1-0に封じて決勝進出。

奈良尾クラブは二回戦の美津島フェニックス戦で3-3同点の一死満塁制延長戦をモノにすると、準決勝は売り出し中の長崎日野自動車。エースの中村は一回戦で平戸クラブの21人から9三振を奪う完全試合を達成し、二回戦も危なげなく4-1勝利している。

海星高で甲子園のマウンドを踏んだ本格派右腕の中村と中五島高校軟式出身で左腕・平田との投げ合いは六回を終わって0-0。ここまで内野安打1本の奈良尾は先頭が安打出塁後二盗と犠打三進。ここで津田祐一(現・県連副会長)の中犠飛が決勝点となった。

決勝戦。奈良尾はここまで三連投の中興・岩本を攻め着実に加点し八回を終わって5-0。中興は奈良尾の三宅、平田の両左腕に散発3安打に抑えられていたが最終九回に打者8人を送り猛攻をかけるも3点止まりに終わった。

閉会式で松浦継義県軟式野球連盟会長は両チームの健闘をねぎらうと共に「離島チームの優勝は今後、郡部チームの発展にも大いに励みになると思う。来年も精進して欲しい」と好評。奈良尾クラブを先頭にダイヤモンドを一周して三日間にわたる熱戦の幕を閉じた。



【中興】	打安点	【奈良尾】	打安点
③福島	5 0 1	⑧森	4 1 1
⑧田淵	5 1 1	④金崎	4 1 2
⑤永利	5 0 0	⑤津田	5 1 1
①岩本	4 1 0	⑥金丸	3 0 1
⑥吉田	4 1 0	③1平田	4 2 0
⑨国生	2 1 0	⑦浜山	3 0 0
⑦尾野	4 1 1	⑩3三宅	4 1 0
②田川	4 2 0	②宮崎	4 2 0
④志水	2 0 0	⑨本浦	1 0 0
	35 7 3	R9浦口	2 1 0
			34 9 5

離島チームの活躍が目立った昭和50年代

長崎県軟式野球連盟の末端支部には離島の4支部がある。福江南松が分離して昭和49年に上五島支部が誕生し福江、壱岐、対馬の4離島支部となった。

全国大会に出場したのは、高松宮杯2部では52年優勝の上対馬漁協と56年の上五島ファイヤーバード。

全国の土は踏めなかったが県代表で九州ブロック大会に進出したのが、1部は54年の福江球友会、56年の上五島クラブ、58年と61年の海王(対馬)など。2部では53年の上五島クラブ、55年の石田ジャガーズ(壱岐)、58年は崎山クラブ(福江)が九州の地で敗退している。

また昭和54年から始まった『西日本軟式大会』においては、オール富江(福江)が第1回2部に。長崎県で開催された60年の第7回1部に上五島ブローズが開催地出場してベスト8に進出するなどの活躍があった。

昭和23年に始まった『長崎県民体育祭=41年から体育大会』は、当時の状況から全地区参加とはいかず、壱岐と対馬からは交通の便も悪く、両島に当時は離島であった平戸を交えた3島間の輪番開催による『玄海体育祭』(昭和24年から46年までに18回開催)の参加もあり、県民体育大会への参加は無かった。

昭和36年第13回県民体育大会軟式野球競技会以降の記録では、48年に対馬が準優勝。2年後の50年には福江ビクトリーが優

S.50年の福江ビクトリー	S.53年の福江ビクトリー
5-1 早岐機関区(佐世保)	7-1 壱岐パワーズ
4-0 有明町クラブ(南高来)	2-1 長崎無線電報局(諫早)
3-1 全大島(西彼杵)	1-0 東芝セラミックス(東彼杵)
5-0 平戸クラブ(平戸)	5-4 海自造修所(佐世保)

勝。52年に壱岐が準優勝すると翌53年は福江ビクトリーが二度目の優勝。3年後の56年は対馬の海王が3試合を0-1勝利した決勝で親和銀行に敗戦。

それから2年後の58年は上県クラブが対馬勢三度目の県体決勝戦進出で初優勝を飾った。

S.56年の海王	S.58年の上県クラブ
1-0 勝本北星(壱岐)	4-3 平戸クラブ(平戸)
1-0 奈良尾クラブ(南松浦)	3-1 波佐見コスモス(東彼杵)
1-0 健友クラブ(島原)	3-2 轟クラブ(北高)
1-5 親和銀行(佐世保)	3-1 御厨クラブ(松浦)

59年の上五島クラブも3試合0封で決勝進出。御厨クラブから逆に封じられた。

S.59年の上五島クラブ	S.60年の勝本北星
7-0 球友クラブ(大村)	6-0 美津島マーシャルス(対馬)
1-0 田川スラッガーズ(東彼杵)	不明
3-0 勝本北星(壱岐)	不明
0-1 御厨クラブ(松浦)	三菱重工長崎

60年の勝本北星も勝ち進んだ決勝の相手は三菱重工。一敗地にまみれた。

県選手権大会ベスト4に離島勢2チーム

昭和57年の第32回県選手権大会は長崎日野自動車の4連覇が注目されたが、準決勝で対したのは対馬の豊玉クラブ。豊玉は7回表に1点失点し日野が逃げ切った。準決勝第二試合は親和銀行と壱岐の勝本北星。勝本は1-3と粘ったが敗退し、決勝は親和銀行が日野の4連覇を阻み6年ぶり二度目の優勝を勝ち取った。

62年の第37回県選手権大会で優勝したのは3年連続6回目の親和銀行。準優勝は三菱重工長崎だったが、準決勝で親和銀行に敗退(0-5)したのが奈良尾クラブで、三菱重工に1-11と大敗を喫したのは、対馬の海王。ベスト4に離島の2チームが残った。

島原・南高が分離したのは昭和57年

霊峰・雲仙を中心とした島原半島は島原市と16町とで成り、県連盟発足当時から『島原・南高支部』組織を形成していた。県下郡市対抗(現選手権)が始まって15年間の同地区代表はニュースターや島原市役所などの島原市からの代表チームが殆んどだった。

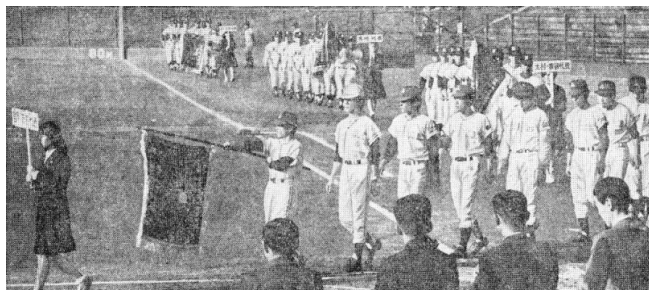
有明クラブ(南高来郡有明町)が5年ぶり二度目の出場した昭和41年から、分離して南高来支部ができる前の56年までの16年間に二度の5年連続を含む13大会に有明クラブが県選手権大会に地区代表で出場している。

昭和52年第27回大会では11度目の参加で初めて決勝戦進出。同チームで10年以上エースの金子一雄(31)が準決勝で前年初優勝で推薦出場の親和銀行に投げ勝ち(2-1)、三菱重工にはソロと3ランの2発を浴びて沈んだ(1-4)。

有明町クラブは昭和48年第17回高松宮賜杯1部の県代表で九州大会に出場。佐賀(宮島醤油)を延長12回4-3で下し、代表決定戦の佐伯オリオンズ(大分)も延長19回の死闘を金子が連投し1-0勝利。島根県での全国大会は静岡代表に2-4と苦敗している。

島原、南高が分離した2年後の58年選手権でも16回目の出場を果たし、36歳になった身長155cmの金子はマウンド上で躍動。二回戦では強打の三菱重工長崎を失策による1失点に抑え2-1快勝。準決勝では中興化成工業の34歳左腕の岩本と投げ合い(4-0)、決勝では親和銀行の2年連続三度目の優勝を見届けることになった。

金子は長崎国体前年の43年国体予選の平戸クラブ戦で延長26回を投げ抜き0-1敗戦した記録もあるが、45年の24歳の時、交通事故で左目を失明し義眼に。再起不能と言われながらも血のにじむ努力で復活。その後の活躍にいたっており70才を過ぎても少年野球(有明中クラブ)の指導者を続けている。



昭和44年第19回県選手権大会の開会式で行進する有明町クラブ代表旗を持って先頭を歩くのが155cmの金子一雄(23)

島原・南高のチームで昭和年代に中央大会で好成績を挙げたのは次の3チーム。

55年第2回西日本2部で島原市役所がベスト4。

61年第8回西日本1部の小浜クラブもベスト4。

63年第10回西日本2部の南串野球部は2部における初の準優勝。翌年昇格して1部の西日本大会でも初戦初戦突破している。

S.55年	西日本2部の島原市役所
【二】	8-7 大分:姫島クラブ
【準々】	4-1 鳥取ファイターズ
【準】	1-12 島根:田伎ファイターズ
S.61年	西日本1部の小浜クラブ
【一】	3-1 高知:横山病院
【二】	5-0 山口:山大スターズ
【準々】	9-3 和歌山:和電ハワーズ
【準】	1-3 愛媛:住友別子野球部
S.63年	西日本2部の南串野球部
【一】	4-1 広島ジャガーズ
【二】	3-2 和歌山郵便局
【準々】	6-2 兵庫:菱南ブロック
【準】	3-1 山口:キャラ
【決】	0-2 沖縄電力

審判技術の向上をめざし、審判協会設立

野球試合に審判は付き物だが、軟式野球の振興を図るためにも審判技術の向上が必要である。全日本軟式野球連盟では昭和34年から審判技術全国講習会をスタート。38年からは全国3地域に分け各支部から3名が参加しての講習会受講者はそれぞれの支部での伝達講師として活躍するなどの成果を挙げたが、さらに40年に審判技術指導員制度を設けその育成研修会を開催することにした。

これは各支部で開催する審判技術講習会の際、講師となる人材の養成を目的としたもので各支部から1名あてを集めて2泊3日の審判技術研修会を開催。5回の出席者を指導員に認定した。これにより昭和45年に各支部1名の指導員が配置され、各支部ごとに定期的に講習会が開催され長崎県連は松尾隆藤(38)がその要職についた。

しかし各支部1名の指導員では行き届かない点があるため、50年からは1支部3名の指導員配置を目標にそれまでの3地域講習会を取りやめ東西2ブロックに。54年からは統一して全国講習会とした。

その前年の53年から長崎県下の審判員親睦のため『各支部対抗審判員親睦野球大会』が始まり大村での第1回を皮切りに各支部持ち回りでシーズンを終えた土、日に集って前夜祭では審判談義に花を咲かせた。だが31回目となった平成20年の対馬大会をもって各支部審判員の減少化や高齢化により親睦野球大会は一応の終了となったが、10年を過ぎた近年に懇親会だけでも復活しよう…との声がベテラン審判員の間で持ちあがっており、復活を期待するところである。

親睦野球大会が始まって4年後の57年に審判技術の向上と審判員相互の親睦を図る目的で『長崎県公認野球審判協会』が設立され、当初に公認された審判員数は16支部合計で335人。会長に松沢繁(長崎)、理事長が平井清光(同)、審判長に松尾隆藤(県北)、副審判長が54年3月に全軟連技術指導員となった陶山裕介(島原)に、上川善高(長崎)と平田俊男(福江)。事務局長には佐藤登(長崎)。

平成17年から協会の名称が『長崎県軟式野球連盟審判部』と改称され役員組織も変更された。

全軟連審判技術指導員になるには中央での講習会を5回受講しなければならなかったがブロックでも研修会がもたれるようになったため、これに2回参加すれば全国は3回で技術指導員認定を58年からするようになった。

長崎県では陶山裕介(54年修了)、内山克則(57年修了)、丸山隆幸(H7年修了)の3人の指導員が、長いこと県内の審判技術指導を行っていたが60歳定年制制度により年長順に丸山、陶山、内山と相次いで引退。22年3月に全軟研修を終了した山下英一郎(長崎)と、藤山隆一郎(諫早・H24年終了)、田中康隆(諫早・H28年終了)の3名が全軟連審判技術指導員で、九州連合会審判技術研修会を3年連続受講した10名程度が九連審判技術指導員となっている。

県軟式野球連盟審判部の登録審判員数は年々減少傾向にあり、平成15年は450人登録であったが7年後の22年は100人減の350人の登録審判員数となり、さらに7年後の29年は319人である。

高松宮賜杯1部全日本大会準優勝の轟クラブ

北高来郡は諫早市を挟んで、北に高来町と小長井町。南に飯盛町と森山町の4町からなり、昭和54年に諫早・北高支部が分離し4町で北高来支部を形成した。

53年までの県選手権大会は諫早市からの代表チームが殆んどだったが、分離した1年目の54年からは3年連続で轟クラブ(高来町)が北高代表で参加しベスト4に二度なっており、前述のとおり54年の第23回高松宮賜杯全日本2部大会ではベスト4進出の偉業も達成している。

また55年と57年の県民体育大会では準優勝するなど、どうかしたAクラスでは勝てないほどの実力派チームの轟クラブが、59年の第28回高松宮賜杯1部九州予選で鹿児島丸屋産業を2-1、福岡の三協クラブを2-0で撃破し新潟での全国大会に出場した。

伊東章義、久世文彦と力のさほど変わらない完投能力十分な投手を二人擁しているのがこのチームの強みで、伊東は柔道からの転向組だがもうベテランの域。上からでも横からでも時に応じて投げ分ける。久世は諫早高校時代も投手だった下手投げ。ともにコーナーを突いて打たせて取る技巧派。それだけに守備がしっかりしていなければならないが、これが鉄壁。

久世、伊東とも完投できるため九州では1試合ずつ分担して投げたが全国大会でも同じ。肩を痛め注射を打ちながら登板の久世はやや四球が多かったが、初戦の専売地方局福島に4-0で完封。次の川鉄コーラルズ(兵庫)戦には伊東が安定したピッチングで3-0と1点も許さぬ文句のない勝利投手ぶり。

翌日の五大化学(山口)との準決勝戦は久世の番だったが1-0と本人にとっては2試合連続。チームとして3試合無失点で勝ち上がってきた。いずれも早い回に得点して自チームのペースに持ち込んだのもよかったが、投手陣の頑張りは驚くばかりであった。

決勝戦の鷺宮製作所(埼玉)戦も、伊東が乗ずるスキを与えなかったが打線に決定打が出ず0-0のまま延長戦へ。延長12回表に走者を二塁に置いて打球は三遊間。強い当たりだったのでそのまま抜けていれば二走は本塁が無理なケース。だがボールは遊撃手のグラブに当たり転々と…。

ワンチャンスをモノにした鷺宮に対し、その裏の轟は東川静夫と代打久世の長短打で無死一三塁。絶好の反撃機を迎えたが、これまでの試合で成功した強攻策もこの時は裏目に出て実らず。「ここまで来たのだから優勝したかった」と山口義春監督は語ったが、ナインの気持ちも同じ。

数は少なかったが新潟まで乗り込んで声援を送った山田伸弘町長をはじめOB会代表や、東京の轟会代表らの応援団も悔しがることしきりだった。

- 【一】 4-0 専売地方局(福島)
- 【二】 3-0 川鉄コーラルズ(兵庫)
- 【準】 4-0 五大化学(山口)
- 【決】 0-1 鷺宮製作所(埼玉)

第28回高松宮賜杯全日本大会1部準優勝の轟クラブ

(監督)山口 義春、東川 静夫、伊東 章義、川田 順一、久世 文彦、田端 浩之、山口 玉留、峰松 俊蔵、中山 勝、道副 直、浜崎 繁、伊東 康隆、芦塚 勝、津田 良信、前田 正文、立岩 広明、西尾 清隆、山口 辰美、谷端 和豊、野副 統一郎、東 元幸



親和銀行が九州A級大会のチャンピオン

昭和59年5月に鹿児島県で開催された第7回九州連合会長杯大会で親和銀行が初優勝した。県予選会にはA級登録の三菱重工長崎、長崎日野自動車、海自造修所、長崎無線局、福江球友会、福江ビクトリー、平戸クラブ、御厨クラブ、有明町クラブ、上五島クラブの11チームが参加した。

九州大会での親和銀行は前年の天皇杯全日本大会決勝戦で東京代表のライト工業と延長45回の死闘を演じて準優勝となった田中病院(宮崎)を七回コールドの8-1で倒すなどしての九州チャンピオンとなった。

だが、親和銀行はこの後の国体予選では三菱重工の後塵を拝すると天皇賜杯でもダブルパンチ。年最後を締めくくると第34回県選手権大会では3連覇を狙った開会式直後の第1試合で奈良尾クラブの左腕・平田から5安打し毎回のように得点圏走者を出しながら0行進。奈良尾は二回にタイムリー打が出て1安打勝利。県選手権大会で初戦敗退したのは13回出場で最初の14回大会以来二度目のことだった。

昭和50年に全軟連と中体連の共催で全日本少年軟式野球大会が始まり、ブロック代表で第1回に玖島ク(大村)が、第4回に佐世保相浦クラブが出場したが上位進出はできなかった。この大会も中体連の事情で独自に開催することになり55年第6回大会で中断した。

しかし、開催地である横浜市の強い要望もあり中学生のクラブチームを対象でブロック代表16チームが参加して横浜スタジアム使用の大会が始まったのが昭和59年。長崎県チームは中々九州ブロックを突破できずにいたが平成26年に波佐見中が優勝。翌年は日野中学校が準優勝に輝いたが、そのことは後述する。

昭和60年になると、西日本1部大会での諫早クラブの優勝や、奮起した親和銀行の天皇賜杯全日本ベスト8に極めつけは国体準優勝などの朗報があったが、それは次ページに持ち越す。

昭和61年に軟式ボール(一般用)の呼称が従来のLからAに。中学用がAからBに変更された。

さらに平成18年は表面のディンプル(窪み)が無くなったボールに改良され、12年後の平成30(2018)年からはM(メジャー)号球へと変遷していった。



軟式の捕手にもレガードが義務付けられたり、中学生に打者走者ヘルメット着用が義務付けられたのも、この昭和61年で、一般の打者走者への義務付けは昭和63年からである。

長崎県開催の西日本1部大会の優勝は諫早クラブ

長崎県で初めて全国大会を開催したのは、昭和38年の第14回西日本準硬式大会。会場は長崎市と諫早市で、第一養魚クラブ(長崎)が2勝を挙げベスト8。日本冷熱工業は二回戦進出を果たした。それから6年後の昭和44年に長崎国体を運営し、永らく長崎県での全国大会開催はなかった。

昭和60年第7回西日本1部大会は長崎市大橋球場、三菱球場と諫早球場の3会場使用で5月11日から四日間開催され、開催地枠を含めた3チームが大会に出場した。

諫早クラブ	【二】 3-2 広島銀行(広島) 【準々】 1-0 チャレンジャー(島根) 【準】 2-1 川澄化学(大分) 【決】 2-1 日本たばこ都城(宮崎)
長崎県経済連	【一】 6-2 ニチデン機械(滋賀) 【二】 4-1 佐賀米商(佐賀) 【準々】 0-7 日本たばこ都城(宮崎)
上五島プローズ	【一】 5-1 ことぶき倶楽部(兵庫) 【二】 5-0 ポーイズ(和歌山) 【準々】 0-7 守口門真消防組合(大阪)

諫早クラブは4試合全て1点差で勝ち抜いて地元開催に花を添えた。その立役者は59年に大村工業を卒業した若きエース山口智弘の推進力だった。

この諫早クラブは県選手権大会において42~50年の9年間に五度出場し50年第25回大会は準優勝。43年の高松宮賜杯1部大会に県勢として初出場した諫早クラブとは別モノである。西日本1部大会で優勝した鮎川博監督の回顧談をまとめてみると…。

諫早球友会の監督だった鮎川は、諫早連盟の松原泰会長から「地元開催の大会だからB級選抜チームを作り西日本大会に参加するように…」と言われ、千住クラブ、諫早信用金庫、九電諫早営業所から選抜した1年限りのチームを作り、チーム名は現存チーム名でなく『諫早クラブ』とした。

ところが前述の諫早クラブは既に活動していないとは云え実績を残してきたチーム。監督の鮎川は諫早クラブで長年にわたってエースとして活躍した宇土直善(52)宅へ出向き事情を説明すると、「チーム名に恥じないような成績を期待しているヨ…」の快諾を得た。優勝の栄を受けると、宇土の元へ報告に行ったのは言うまでも無い。

昭和60年 第7回西日本軟式野球大会 1部優勝の諫早クラブ
(監督)鮎川博 (主将)山口 伸一 (投手)山口 智弘、西山 俊彦
(捕手)石丸 裕二 (内野手)伊東 伸二、高藤 義弘、大久保 俊則
野田 一男、前田 真一、川原 孝志、川原 智弘、峰原 利光、藤山 博記
(外野手)井原 尊幸、野田 誠、野田 俊之、田中 伸義、永江 仁、早田 靖夫



昭和60年に中央大会で大暴れの親和銀行

8月の第40回天皇賜杯全日本大会で3年ぶり11回目の親和銀行が三度目のベスト8に進出すると、10月の鳥取国体でも7年ぶり6回目の出場にして、初の準優勝に輝いた。

天皇賜杯大会	【一】 2-0 富士電機東京工場(東京A) 【二】 2-0 東京アルプス古川(宮城) 【三】 6-5 南幌町役場(北海道南) 【準々】 2-5 佐久総合病院(長野)
国民体育大会	【一】 4-0 日本たばこ金沢(石川) 【二】 8-0 NTT徳島(徳島) 【準々】 4-0 佐藤薬品工業(奈良) 【準】 3-2 ライト工業(東京) 【決】 0-5 三洋電機鳥取(鳥取)

初戦の石川戦は宮添裕康の3ランで優位に立ち大黒柱の高藤文明が被安打3奪三振9で完封。徳島との二回戦は9安打に10盗塁を絡ませる機動力で相手をかき回し8得点。守っては高藤が5回まで散発3安打無失点。六回から若きエースの佐々田俊則が3人ずつに抑え準々決勝戦に進出。

奈良戦は序盤から押され気味だったが4回にラッキーな4点が転がり込むと高藤の技巧がモノをいい、4回以降を失策と四球の2走者だけで初戦に続き完封。

準決勝はライト工業。先制するも4回に逆転を許したが、6回に同点としてからは流れが変わり3-2で勝利。

試合終了が宣せられ、ベンチに引き揚げてくるなり15年前の昭和45年岩手国体でベスト4入りした時は捕手だった松尾敏正監督は「夢のようです」。これまでの最高がベスト4。どうしても準決勝の壁が破れなかったのを、それも強豪のライト工業を倒して国体史上初の決勝進出。松尾監督の「毎日毎日ヒーローが変わる全員野球の勝利」の言葉どおり、準決勝でも連投の高藤をリリーフした佐々田が7回以降を内野安打1本に抑える快投。佐々田は昭和54年夏の高校野球県大会決勝で諫早に敗れた長崎商のエース。これまでは球威がありながら自滅するケースがあり、思い切っただけ使えなかったわけだが、二回戦の徳島戦やこの試合でも文句のつけようのない出来栄。

決勝戦はここまで5-0、3-0、5-0と、相手に点を与えずに勝ち上がってきた地元の三洋電機鳥取。全国各地の三洋から補強したチームには健闘及ばず0-5で敗戦した。

昭和60年 第40回国民体育大会軟式野球準優勝の親和銀行
(監督)松尾 敏正 (主将)古川 一彦 (投手)高藤 文明、佐々田 俊則
(捕手)黒石 有二 (内野手)竹山 良次、辻 章、田中 勝也
与那嶺 和憲、高柳 伸介、久住 呂 浩司、岩崎 清隆
(外野手)川崎 浩、宮添 裕康、宮田 一法

